

# 為永清嗣社長に聞く

1969年、為永清司によって東京・銀座に開廊したギャルリ—ためながは、その2年後にはパリ、大阪にも画廊を開き、本格的な西洋絵画を日本に紹介する画廊として活動を続けてきた。そして今年で50周年を迎えた。半世紀の歴史を刻んだ同画廊の社長為永清嗣にその軌跡と画廊の使命について伺った。



フランス一辺倒だったのを  
グローバルな方向に広げて

—50周年を迎えて、特に感慨  
というのはありますか。

為永 私としてはひとつの区切りとしか捉えていない。激動の時代でもないけれど、長い間一つのことを続けていくことはそれなりに大切なのかなという程度でこの50年を捉えています。創業者は大変だったと思います。が、土台の出来上がった中で私が継いだ30年間は特に大変と感じたことはありませんでした。ただ、社会も時代も変わる中で先代が築いてきたことをそのまま継いでも行き詰まってしまうので、根底にある基礎理念は継承しながらも、方向転換までとは言わないけれども私なりに新

しいことに取り組んできた30年間だったように思います。

— 具体的にはどんなことが変わりましたか。

為永 今でも皆さん画廊には入りにくいと言いますが、当時のギャルリ—ためながは、そんなものではなく、入り口からして重たいドアを開けて入るようになっていました。中は薄暗く、ひとつひとつの作品にスポットライトを当てて重厚感を出すという見せ方はフランスでも日本でも閉鎖的にすら感じていたと思います。私が画廊を任されたからは通りを歩く人から画廊の中が良く見えるようにして、開放的な空間を意識した造作に切

ブランドに流されずに、  
自分の価値観を持って観る人に  
本当の美術の楽しさを知らせたい

り替えました。30周年の際にはパリの店を従来の倍の広さにした後、東京の店も大きく広げました。そういう見た目の部分からも随分と変わりました。

— 扱った作品についてはどうですか。  
為永 創業当時はフランスの近代と現代の作家を日本に紹介することを中心に活動してました。印象派の作品の多くはす

に錚々たる美術館や海外の収集家の元に収まっていた時代です。で、次世代のエコール・ド・パリ等、近代の作品であればまだ美術館にも勝る作品が個人のコレクターに収められるという考えから近代ヨーロッパの作家を扱っていました。その中で創業者が藤田嗣治のアトリエに足を運び交流を結び、荻須高徳やベルナル・ビュッフェを日本

に紹介し続けたことに見られるように、現代の作家を育てるということが画廊にとって最も大切な使命という基本理念がありました。私が引き継いでからもこの理念が変わりはありません。現在はパリの画廊の活動も大きくなってきたということもあり、日本の作家を逆に世界に見せていくという活動が多くなっています。創業当時はそれこそ三岸

節子や片岡球子の展示会をパリで開いたこともありましたが、継続的にということではありませんでした。現在は次々と新しい日本人の作家を育てるという意味でパリの画廊で多くの現存作家の展示会を企画しています。それとは別に、私は幼少時から海外での生活が長かったので、当初から海外の市場中心に美術の仕事に携わってきました。



藤田嗣治「マジョリカ壺の薔薇」



荻須高徳「パリ、サンマルタン運河」

90年代初頭は、まだ美術館が一つもなかったシンガポールやインドネシア、香港、台湾等を飛び回っていました。アジアの為替危機を機にアメリカへと舵を切ったり。

50年前はフランス一辺倒でしたが、今では日本人の他にもアメリカ、スペインの作家も扱うというように世界に視野を広げています。周りの社会が国際的になっていくという中では当然の流れではありましたが。

10代から海外留学をしていますが、先代である父親はそうした国際展開を視野に入れた教育を考えられていたのですか。

爲永 それはいいです。父は私に画廊を継がせる気は、生まれた時から毛頭なかつたようです。私もこの仕事をするとは思わず育ってきました。海外留学も、自発的に12歳の時にスイスへ飛び出して、その後高校でアメリカへ行きたいと言っても父は全く無反応というか、お前がしたいなら、どうぞお前の判断でというような対応でした。

に画商業を始めました。父としては私が美術を好きでもなく、ただビジネスとしてこの画廊を担うのでは負担になると思い、最初から仕事は本当に好きなことをやりなさいという思いやリだっただけです。ただ小さい時から美術に囲まれて育ち、常にその中に居たという環境だったので最終的に美術の道に進んだのは自然の成り行きでした。パリでは店まで持てなかつたけれど、小さな会社を作っていました。しばらくしてから、父がパリの画廊を任せていた人が独立して辞めるという話になり、後継者が必要になった。二代目が継ぐのが筋でしょうと、その人が私のところへ来られました。その気は毛頭ないとお断りしました。けれどもその後も半年位の間に何度も熱心に足を運んでくれて、先代もまあそういうことならいんじゃないかと云う流れになった。私としてはそれなりに違うものを新しく見てきたから、継いだ際にはとにかく好きにさせてくれるという



モーリス・ユトリロ「モンマルトルの風車」



パブロ・ピカソ「浜辺の恋人たち」

——慶応大学を卒業して日本興業銀行に入社していますが、結果的に画廊を継ぐことになったのですか。

爲永 卒業当時は色々な世界を見てみたいという思いで興業銀行を選びました。当時銀行というのはそれこそ全ての業種を詳しく見ることが出来る立場だったので飛び込んだでしょう。その後美術の道に進むのですが、すでに結婚してましたから、家

内とパリに来て、時間もなにも制限ない中で、ヨーロッパを中心にとにかく「美術」を見て周りました。ルーヴル、オルセー、プラド、テート、ナショナルギャラリー、ウフィツィ等で古典を、ドクメンタ、ヴェネツィア・ビエンナーレで現代に触れた気になっていました。当時の4大フェアと言われていた、パーゼル、ケルン、パリ、シカゴにも何度足を運び、各地で多くの画廊

ことを条件に、任せてもらいました。

——それが30年くらい前の話なんです。

爲永 ちょうどバブルが弾けた90年代初頭でした。美術市場も酷い時期で、日本も、世界も凍りついていた感じ。世界中の景気が低迷する中、バブル崩壊のせいとはいえ、私が継いだら業績がどんどん悪くなってきたというのは悔しい。狭い業界なので、2代目になった途端に酷くなったと陰口を叩かれるのも嫌です。時期を間違えたかなとも思いました。下り坂を転げる中、好き勝手やるわけにもいかないで父の築いてきた流れをきちんとこなしながら、海外に目を向けていました。幸い景気が上向いていた台湾、シンガポール、インドネシアに縁があったので、最終的にかなりの仕事をすることが出来ました。多分当時の日本の美術市場で唯一の勝ち組だったのでないでしょうか。若輩だっただけに、よく分からない中も、若さだけで突

き進んだのが功を奏したようにも思います。画廊のスタッフ一同、日本中が沈滞化しているところを、二代目のお手並み拝見

と思っていたのでしよう。結果としては救済者というような構図になったことは運が良かったとしか言えない。その後アジアの為替危機の際には、アメリカに視点を転じて、ニューヨークで仕事をしました。するとアメリカがITブームとなって走り回ることとなった。運と共に常に良い巡り合せの中で仕事をすることが出来ました。

——現在はパリと東京とどくらいの割合でいるんですか。

爲永 半分半分ですね。この生活を始めて30年近くになります。本当に半分半分かな。行ったり来たり30年間でした。

——来客層は随分違うのですか。

——顧客の反応の違いを感じますか。

を訪ねました。そこで幸いしたのは、父のおかげで「ためなが」という名前が海外でも通っていたこと。アメリカの名門画廊に行っても、名前を言えば、そのオーナーが出てきてくれる。あなたのお父さんとはという話が出てくる度に自分の恵まれた立場に感謝したものです。父からはずっと継がせないと聞われているし、私もそれはやらないよと言っていたので、父とは別

うね。

爲永 銀座の店はちよつと前までは、ほぼ100パーセントが日本人のお客様。ただ近年、海外の方が日本にも立ち寄られるということがあります。基本的には日本人のお客様。逆にパリの店はほぼ100パーセントが日本人以外のお客様。ただパリという立地から言って、フランス人だけではなく、スイス、ベルギー、ドイツ他ヨーロッパ各国からのお客様が多く来廊されます。アメリカからのお客様も少なくないですね。10年前からロシア系が増えたり、中東の人が増えたりと世界情勢によって客層が変わってくるというところはあります。香港と台湾の方は少しいらつしやるけれど中国人は意外に少ないですね。やはり西欧の方が圧倒的に多い。

## 感性、そこに関わっている仕事は最後の人間としての砦です

爲永 パリでは、比較的流行にとらわれることなく作品を観て

くれる傾向がありますね。勿論全員ではありませんが、日本人はブランド信仰が強いのかなと思うことが多い。右に倣えて、誰も彼も「かぼちゃ」を買えばいいのかなとなるわけです。自分の感性で、観た上で何が欲しいということではなく、ブランドで選んだ「かぼちゃ」が欲しいと。もっと素直に自分の感性を大事にして欲しいと思います。かぼちゃを見て感激の涙が出るのであれば勿論それはそれで良いと思いますが、ひとそれぞれ感性ですから。

——画廊の在り方の問題ですね  
爲永 本来画廊の仕事はブランドビジネスではありません。それぞれの作品に対して、皆さんの主観で観て感じて楽しんで頂かなければ、美術なんて意味がないと思います。作家の名前で買ってもらったのではそれこそ意味がない。投機で買うのかな、何が楽しくて買うのかなと思ってしまう。

——オークションレコードが、評論より関心をもたれているところがある。  
——当然のことのようですが、一点一点、丹念に制作された作品を、扱っていくということですね。

爲永 ブランドに流されずに本当に自分の価値観を持っているという人は多くはないかもしれないけれど、それでも私の周りにはいらっしゃる。世界にはもっといらっしゃる。その方たちに評価いただけるような仕事をしたいければ、私の画廊にとっては充分。将来、世界をAIが席巻して、単一化された価値観がブランドイングされて、感性が全く育たなくなるような

いう時代でもありませんね。

爲永 いつも言っています、美術がマネーゲームになっているところもありますね。そこに莫大なお金が入り込んで、オークション会社を通じて価格を釣り上げるようなシステムになっている。自分達で故意に価格を釣り上げて価格の既成事実を作り上げるといって、単純なブランドイングで価値を付けるのが常套手段となっているにも関わらず、その価格に踊らされて1億10億だ100億だと騒いでいる。例えば数年前から急に取引沙汰されて、中には今でもせつと制作している作家の作品が何故モネやピカソと同じ価格帯で取引されるのか、疑問に思わない人達が大量いることが私は理解出来ない。ワインで言えば、味というより、価格が高いから良いというような人が多いのかなど。アメリカを中心に美術のブランドイングが世界を席巻している。そういう中で、一人反抗しているわけじゃないけれど、投機的価値観ではなくて、

ロボットの世の中になったら別かもしれないけれど、それでも、AIが蔓延れば蔓延るだけ、逆に、人々は人間としての感性を大事にするのではないでしょう。か。そういう意味では、AIが入り込めない領域として一番最後に残るのは芸術だと思っています。つまりは私の仕事だと思っています。

——そうして50年続いてきて、これからは100年を目指すと

いうことですか。  
爲永 100年というようなことは考えたことはありません。続けていく結果として何年経ったというに過ぎないように思い

ギャルリーためながでは扱っている作品の質を見て欲しい。同じ「画廊」という業種と言われても、別の業種だと自分の中では思っています。本来そうすることはブランド会社に任せておけばいいのですがね。

——同じ「画廊」と呼んでも別マーケットとは：  
爲永 私が扱う作品は10年後にいくらになるのかな、という観点ではなく、この作品を前にすると心が踊りませんかという価値観。とにかく心を動かされる作品か否か。単純にその作品を制作できる才能を見つけて、世

に出していくということに尽きる。逆に極端な例ですが、ブランド的な作品ならいるんな人が工房で創って、年間に何百点と生産出来て、それなりの値段が付いて、世界中の人が欲しいとかなるような広告をする。それとは全く違う世界ということ。例えば菅原健彦さんにすごい人気が出て、火が付いて、みんなが欲しいとなったとしても、描ける枚数は人間なんだから限られている。それが100倍あつたらホクホクになるかもしれないけれど、それはできない。だから違うビジネスだと私は思っている。

ます。それよりも、趣味人を気取って良い悪いと言っているのは簡単だけれど、常に名品として残るべき作品を世に出していくことに専念することが私の使命と思っています。ブランドの発信の仕方とはまったく違うけれど、展覧会を企画して多くの方に作品を見て貰う。評価して貰う。コレクションに加えて貰う。この循環が上手く回ることで、作家も制作に励むことが出来る。励むことによって名品が生み出される。名品を見て多くの人が胸を打たれる。画廊で見るにしても、自宅に掛けて見るにしても、何れにせよ感

性豊かな生活に繋がるのではないのでしょうか。本当の豊かな生活とはこういうことだと私は信じています。

——今後の展望を最後にお聞かせください。  
爲永 最近息子が画廊の仕事を継ぎたいと。どのようにして次の世代に繋いでいくのかがこれからの私の課題のひとつ。祖父のことも、私のことも真似るなとは話していますが、本人がどう考えているかは知りませんが、当然私達が経験してきたこと等、色々学ぶことはありますが、古い時代に捉われずに、新しい時代の感性を大事にして欲しいと思います。アドバイスはします、ブランドに流されずに感性を大切に作家を育てるといって今迄築いてきた基本的理念を守ってくれば、後は彼なりの考えや、感性で次世代のギャルリーためながを続けていくことでしょう。

——本日はお忙しい中、ありがとうございました。



マリー・ローランサン「三人の少女」

●開廊 50周年記念 名品展  
ギャルリーためなが (銀座) ⑬  
開催中→12月8日

ピカソ、シャガール、ルノワール、藤田、ヴァン・ドンゲン、デュフィン、ルオー、スーチン、ルドン、クスリング、ローランサン、ユトリロ、ヴラマンク等、約40点を展示



ヴァンセント・ヴァン・ゴッホ「種を蒔く農夫」